

2. 参加者の感想、提言

(1) 現地調査実施日

- ア 雨天を理由に中止するとデータがさらに減り、比較検討をしにくくなる。予備日の設定が必要。
- イ 調査時期を大潮に合わせ、水中からの採取をなくすことにより、より正確な底生生物が採取をすることが必要。調査地点 3-2 は水深が深く調査を断念した。

(2) 調査地点

- 調査地点にアサリ取りの部外者が入ってしまうと、正確な調査ができない。
- 今回調査地点 3-1 の近くでアサリ取りの部外者がいた。

(3) 調査方法

- ア 調査ポイントで以下の工夫が望まれる。
 - ・砂泥の判定の統一（開始する前に手本を見せる等）
 - ・サンプル採取条件の統一（現地で手本を見せる、1 地点 2 サンプル採取するなど）
 - ・調査地点の印象の共有（他地点との比較、目視等。他の調査地点も見てまわる。）
 - ・それぞれの地点の状況をデジカメ等で残してはどうか。
 - ・地形の違いによる波当たりの違いなどを考察できるよう、地形などを考慮すべきでは。
- イ 事前勉強会で、各班同一な採取条件を確認しあう必要がある。
- ウ 幅広いエリアでサンプリングするため、より多くの参加者が必要。既に市民調査や観察会を行っている NPO などに、積極的に声を掛けていくとよい。

(4) ソーティング、同定

ア 調査・同定の際に、専門知識のある方が不足しがちなので、「s p.」扱いサンプルの同定など、専門家のサポートが必要。

イ ソーティング、同定において、以下の工夫が望まれる。

- ・稚貝や見落としそうなゴカイなどは特に、ソーティング前に手本を見せる等の工夫をする。
- ・見落としを防ぐため、ソーティング済みサンプルを再度ソーティングする。
- ・ソーティングを円滑に行うため、海水を持ち帰る。
- ・ちぎれたゴカイや、マテガイ等の個体数の統一を事前に確認、統一しておく。

ウ 一般から参加する人たちにとって、種の同定はほとんどの人が初めての作業と言わざるを得ないため、どの程度まで分類すれば良いのか、それぞれの種にはどのような違いがあるのかといった前情報がほとんどない。そのため、分類の精度が調査ごとに違っていたり、海なのにミミズがいたりといった状況が起こっている。そこで、調査前にせつかく事前勉強会を開いているのだから、三番瀬に生息する代表的な底生生物の紹介や、それぞれの特徴等を前もって教えることも必要。

(5) データの取りまとめ

各調査地点で採取された底生生物について、種ごとに縦軸に全長を、横軸に個体数をとったグラフ数年に渡って作成することで、去年 A 地点にいた個体が、今年も A 地点で育っているのか、あるいはそこから移動してしまっただのかといった判断の基準になるのではないだろうか。また、そういった基準を作成することで、三番瀬のその地点が、底生生物にとって住みやすい状況であるかどうかを判断する材料になるのではないか。

(6) 考察会

ア 観察会参加者ができるだけ考察できるように、休日実施が望まれる。

イ 調査の「振り返り」の実施し、それをもとにマニュアルの見直しを行い、さらなる調査の向上を目指すことが必要。